

三成美保・姫岡とし子・小浜正子編

『歴史を読み替える』

ジェンダーから見た世界史

大月書店 二〇一四・五刊

A5 三三〇頁 二八〇〇円

かつて上野千鶴子は、「今日あらゆる分野で、ジェンダーだけで対象を分析することはできないが、同時にジェンダー抜きで分析することもできなくなった」と喝破した。至言ではあるが、この命題を証明することは困難でもあった。一部の時代や地域、テーマを切り取って論じるだけでなく、古代から現代まで、アジアやヨーロッパ、アフリカやアメリカ、さらに政治史や外交史といったテーマまでも「引き受ける」ことで初めて、ジェンダーという視点の「全体史」としての重要性が明らかになるからである。そうすることでジェンダーは「サブ・ジャンル」としての地位を脱し、「主流化」への道が切り開かれるのだが、それは一人の研究者の手でなし得ることではない。今回こうして、二〇人の執筆者の共同作業により「ジェンダーの世界史」がまとめられたことは、「歴史学におけるジェンダー主流化」への一里塚として決定的に重要であるだけでなく、そうした通史を執筆できるだけの研究蓄積が日本のジェンダー史研究にあることを示した点でも、画期的な出来事であろう。

本書の章構成は高校世界史教科書に従ったものとなっており、

ほぼすべての時代や地域を視野に収めている。それぞれの章は「概説」「各論」「特論」の三つに分かれており、どの項目も左右見開きの二頁で完結している。左のページが概要、右のページには語句や概念の説明や人物紹介、史料や統計の引用、コラムなどが簡潔にまとめられている。全ての項目に日本語の参考文献があげられており、その事項に関心を持った読者が発展的に学習することが可能な仕組みになっている。

全体的な印象としてまず残念な点を三つあげておくと、第一に世界史の基礎知識や通説を身につけた学生でないと理解が難しいと思われる箇所が多く、理論的な説明についても決して平易な表現とは言えない。第二に近世・近代は欧米が記述の中心であり、それ以外の叙述がきわめて少ない。第三に、総説で「男性性（マスキュリニティ）の歴史」が独立した項目としてあげられているにもかかわらず、ごく一部をのぞいてそれが個別の記述に反映されておらず、全体的にジェンダー史というよりは女性史的な記述が目立つ。

しかしそれはジェンダー史が「主流化」していく過程で今後克服していけばよい課題であるし、外戚・宦官、纏足、フランス宮廷の貴族男性、中絶薬の伝来、サティール（寡婦殉死）、優生学といったテーマがジェンダーという軸へと磁石のように吸い寄せられていくのを目の当たりにするのは、刺激的な読書体験である。こうして地域と時代を縦貫した通史が書かれることによって、ジェンダーの歴史的文脈（固有性）と、多くの時代・地域における共通性（普遍性）の両方について、読者は自ら考え直すことを迫られる。

何より右ページには、興味深い細部が満載されている。大学の歴史教員の手元にあるときわめて便利な一冊なのではないだろうか。
(小野寺拓也)